

ジャーナリズム・政策研究所
講義要綱（2020年度）

5月13日改訂版

【マーケティング調査から始まるーそして商品が生まれるー】

(火曜日・1時限講義)

坂本 律行

企業は調査を行って、自らの商品やサービスに対する意思決定をしています。新しい製品やサービスのアイデアを洗い出し、ふるいにかけて絞り込む、コンセプトをまとめ、調査を行い、分析する。消費者の手元に商品とサービスを届ける。多くの消費者の購入へ至るまでのあらゆるステップがマーケティングです。市場における消費の動向に関するファクト（事実）を知ることが調査そのものです。それが商品やサービスの開発の出発点となります。

この講座では自分が手にする商品が手元に届くまでのストーリーを感じられるようにお話していきます。

ポイントは次の4つ

1. マーケティング・リサーチ（目的と調査手法／分析の方法、分析結果の見方）
2. コンセプトとターゲット／シーンとベネフィット
3. 市場の考え方、既存の市場と新しい市場、競争的市場
4. 競合との関係（商品のポジショニング／企業とブランドのイメージ）

坂本 律行（さかもと・のぶゆき）

主に、マーケティングリサーチ・分析の会社で、多くのメーカー、事業会社の調査分析とマーケティングに携わってきた。1982年から通算するとマーケティングリサーチ・分析業務経験は24年。消費財メーカーでのプロダクトマーケティング経験3年／販売管理、営業企画経験が5年。株式会社坂本総合研究所代表。

【体験的ジャーナリズム論】

(水曜日・1時限講義 ※後期のみ)

山 田 克

通信社の記者になって40年、社会部を中心にたくさんのニュースに関わってきました。歴史的な事件・事故、災害はもちろん、臓器移植やエイズなどの医療、薬害、感染症問題、原発事故、埋蔵文化財、教育問題、学術研究もの、スポーツ、国政選挙・地方選挙など、あらゆる社会事象の分野に首を突っ込んできた「何でも屋」です。

日々の生ニュースだけでなく、数十回に及ぶ長期の連載企画にも取り組み、北朝鮮出身のプロレスラー力道山と在日韓国人ヤクザ町井久之の人生を通して日韓関係の戦後裏面史を描いた「伝説たちの時代」、バブル経済の時代を検証した「野望の系譜」、政財界の利権の構造を追った「談合の病理」、死刑囚や家族、被害者、死刑に関わる法務大臣、裁判官、検察官、刑務官、弁護士を取り上げた「執行再開－死刑の周辺」などの企画記事も手がけました。

こうした経験を通して、ニュースとどう格闘してきたのか、そのとき何を考えたのかを紹介し、ジャーナリズムの役割と課題、克服すべき問題点などを体験的にお話しします。現在進行形のニュースもどんどん取り上げます。

山田克 (やまだ・まさる)

共同通信社社会部を中心に記者活動に従事。社会部デスク、大阪社会部長、ニュースセンター副センター長、仙台支社長、東京支社長などを歴任した。現在はOBとして放送報道局委員を務めている。共著に「ルポ高校中退」、「東京地検特捜部」（『談合の病理』改題）など。

【1億人のための起業家的ジャーナリズム入門】

『一個人』に何ができるか】

(前期：水曜日・2時限／後期：3時限講義)

常井健一

マスメディアから流れてくるニュースに退屈していませんか？

新聞や雑誌の実売部数は減少傾向が止まらず、若者のテレビ離れも進んでいます。マスメディア企業では取材拠点の統廃合やリストラが止まりません。同時に、SNSを始めとする一個人の発信が影響力を増しています。当事者や生活者の目線で伝えられる出来事や関心事がネット空間でシェアされ続けられれば、組織ジャーナリズムの担い手も無視できません。産業としてのジャーナリズム、生業としてのジャーナリストのあり方も過渡期にあるのです。

このように、我が国の報道業界を取り巻く受け手の視点・論点、情報のフロー、働き手の境遇などの劇的な変化があるにもかかわらず、記者クラブ制度に依拠し、政府や政党、あるいは大企業、業界団体などが流す発表文や共同記者会見の内容をニュースとして横一線に報じ、独自検証に消極的になりがちなのが、ジャーナリズムの現状でもあります。

一方、一個人がある程度の専門性を身に着け、マスメディアが取材しない／報じない「事実」や「構造」を報じるのが、組織に属せずに「筆一本」で生計を立てるフリージャーナリストの日常です。彼らの活動は、組織ジャーナリズムの「穴」を埋めるだけでなく、政治的・社会的課題を先に察知し、既存メディアに気付きと緊張感を与える役割も担っています。

また、既存企業の看板に依存せず、独自の企画力と取材力を武器に、自らの立場や信頼性を確立し、事業として継続的に経営していくスタイルは、ベンチャー起業家にも似ています。

本講義では、出版社、新聞社、ネット企業、NPOに属した講師の試行錯誤を踏まえ、起業家的ジャーナリズムの方法論とキャリア形成を検討・分析し、「一個人」の可能性と限界を探ります。日本の大学や報道機関での講座で、ジャーナリストの起業家的側面に着目する事例は稀です。既存の枠にとらわれない報じ方や働き方を模索したい方を歓迎します。

○前期 企画と取材の技能→特ダネ記事から読み解く／現場取材やインタビューの実践

○後期 キャリア設計と暮らし→雑誌・ネット媒体のライターや編集者との対談など

常井健一（とこいけんいち）

ノンフィクションライター。1979年、茨城県生まれ。大学時代からネットメディアの立ち上げに携わり、ライブドア、朝日新聞出版を経て、海外留学後の2012年末に独立。取材テーマは、自民党、旧民主党、小泉家、首長選挙、沖縄、脱原発、日朝外交、新宗教など幅広い。17年、「小泉純一郎独白録」(月刊文藝春秋)で、第23回編集者が選ぶ雑誌ジャーナリズム賞。『無敗の男 中村喜四郎全告白』、小泉元首相との共著『決断のとき』など著書多数。

【この世界、そしてニュースの見方】

(木曜日・1 時限講義)

桑 原 聡

講義は2部構成とします。

前半は講師が産経新聞に隔週で連載している時事コラム「モンテニューとの対話」を素材に、コラム執筆の舞台裏を明かしながら、決定稿にいたるまでプロセスを解説します。

後半は、日々の新聞記事を素材に、フェイクニュースや巧みな誘導記事に嵌ってしまわぬよう、ニュースを読むさいの「技術」について説明します。いずれも、参加者の方々に質問しながらの授業となります。

桑原 聡 (くわはら・さとし)

1957年山口県生まれ。産経新聞社で雑誌「正論」編集長や文化部編集委員などを務め、現在は隔週で大型コラム「モンテニューとの対話」を連載中。10年～11年、日本大学芸術学部で「ポピュラーミュージック論」「村上春樹論」を講じる。著書に『わが子をひざにパパが読む絵本50選』『わが子と読みたい日本の絵本50選』(ともに産経新聞出版)、「〈ドン・キホーテ〉見参! 狂気を失った者たちへ」(水声社)、共著に『酒とジャズの日々』(医療タイムス社)などがある。

【メディアリテラシー向上講座～事例で探るメディアのウソとホント】

(木曜日・2時限講義 ※前期のみ)

玉手 義 朗

「殺人事件の容疑者として25歳の男が逮捕されました」
テレビからこんなニュースが流れてきました。この男は本当に犯人なのでしょうか？

「私はこの方法で10キロのダイエットに成功しました！」
バラエティー番組で、お笑い芸人が体重計の上でガッツポーズをしています。
この方法を使えば、あなたも痩せることができるのでしょうか？

私たちはテレビや新聞、インターネットなど様々なメディアから発信される情報に囲まれています。しかし、その中には誤った情報も多く、「やらせ」や「ねつ造」も頻発、安易に信じると、とんでもないことになりかねません。
情報を鵜呑みにするのではなく、自らの力で真偽を判断することが「メディアリテラシー」です。

講座ではメディアの裏側を探りながら、メディアリテラシーを高め、正しい情報の活用方法を身につけて行きます。

玉手 義朗 (たまた・よしろう)

1958年 茨城県生まれ 外資系金融機関などで外国為替ディーリングに従事

1992年 TBSテレビ入社

社会部記者・経済部デスク・CS放送経済ニュースのキャスター

「みのもんたの朝ズバッ！」プロデューサーなどを歴任

【読む・書く・話す・理解し考える

——新聞記事を活用し就活を視野に入れたトレーニング】

(木曜日・3時限講義 ※後期のみ)

真 下 聡

本講座は主に就活準備に入る大学3年生をターゲットとし、新聞記事などを素材に「読む・書く・話す・理解し考える」力を養う具体的なトレーニングを行います。理想は大学2年から始めることですので2年生、1年生の方ももちろん歓迎します。マスコミ志望者はもちろん、そうでない方もこれから生き抜いていく上で必ず役に立つ内容です。講座の中では、個人のパソコンやスマホを使います。授業中に講師とメールのやりとりをすることもあります。

実際に行うトレーニングは、現時点では以下のものを考えています。

1. 新聞記事を「縮約」します。自分で選んだ、もしくは講師が指定した記事について、削っていくことで要約します。300字や150字を目標にしていきます。
2. 記事内容を参考に、お題を設けて考えていきます。例えば新サービスや商品、記事の企画などです。
3. 自分の考えた内容をまとめます。相手に伝えることを前提に、メモなどで流れを整えます。
4. スピーチします。1分間に過不足なく詰め込むことを目指します。
5. 文章として書きます。説得力のある、興味深い文章にすることを目指します。

真下 聡 (まっか・あきら)

朝日新聞ジャーナリスト学校ディレクター

1964年岩手県生まれ。89年朝日新聞入社。取材記者は鹿児島での3年のみで、西部本社・東京本社で新聞編集者を20年以上つとめました。2011年6月の朝日新聞デジタル立ち上げに関わり、デジタル編集長として全社のデジタル発信にも取り組みました。2015年5月からの教育総合本部では、大学1年生向けの作文講座で3年間に1500本以上を読み指導。就活生向けセミナーなどでも3年間に約200本のエントリーシート添削や面接・グループディスカッションを指導しました。現在所属する朝日新聞ジャーナリスト学校では、主に社外の学生、社会人、NPO、シニアなど幅広い方々へ、新聞の読み方や文章の書き方、広報紙づくり、新聞作りについて指導しています。

【出版社の現場から一本づくりの舞台裏】

(木曜日・3時限講義)

下平尾直

読書や本が好きな方におすすめの講座です。

みなさんは「出版」や「編集」という言葉から、何を連想するでしょうか。ドラマ化されるような華やかなギョーカイ？ それとも「出版不況」と呼ばれるように暗くて地道で大変な仕事？ この講座では、本をつくって読者の手元に届くまでの基礎的な知識はもちろん、各界で活躍中のゲストにお招きしたり、本の帯や出版広告を作成したりしながら、具体的に実践的な本づくり＝編集のあれこれを身につけていきます。

*以下の講義内容は予告なく変更する場合があります。

01. 「編集」という仕事
02. 出版社とはどんな仕事をするところか
03. 映画で観る出版社の仕事
04. 奥付を「読む」：本に関する歴史と基礎知識
05. 書物の「解体」学：本はこうやってできている
06. 「わたしの1冊」をプレゼンしよう
07. パクリはなぜダメなのか？：著作権を考える
08. どんな本を世に出せばいいのか？：企画書を書く
09. 校正とはなにか？：考え方と実践
10. 装幀とはなにか？：本というブツの愉しみ
11. タイトルと帯文：キャッチコピーの考え方
12. 印刷と製本：まさに「本」の歴史と文化の担い手
13. 本と読者を架橋する：広告／書評の役割と重要性
14. 本はどこで買えばいいのか：町の本屋さんと「アマゾン問題」
15. 本は買わなくていいのか：町の本屋さんと「図書館生活」

下平尾 直 (しもひらお・なおし)

1968年生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程退学。コピーライター、編集者を経て、2014年に(株)共和国という出版社を創業。以後、藤原辰史『[決定版] ナチスのキッチン』(第1回河合隼雄学芸賞)、山家悠平『遊廓のストライキ』、池田浩士『[増補新版] 抵抗者たち』、ジョゼフ・チャプスキ／岩津航訳『収容所のプルースト』などを刊行。共著に、『表現と教養』(ナカニシヤ出版、2019)、『メディアの本分』(彩流社、2016)など多数がある。

【日経論説講座】

(金曜日・4時限講義)

日本経済新聞 論説委員、編集委員

日本経済新聞の第一線の論説委員らが政治、経済、国際などの分野の背景を講義する。膨大な量の情報がインターネットなどを通じて流れているが、大事な情報を選んで他の情報とつぎ合わせてニュースの全体像を把握するのはそう簡単ではない。ニュースの背景にある歴史的な経緯や人物像を紹介しながら、立体的な現代を描く講義を目指します。

上期

- | | |
|--------------------|------|
| ①総論（メディアリテラシーの磨き方） | 原田亮介 |
| ②コラムはこうしてできる | 大島三緒 |
| ③社会保障と財政 | 大林 尚 |
| ④米国政治と安全保障 | 大石 格 |
| ⑤日本産業論 | 西條都夫 |
| ⑥デジタル化と社会 | 田中暁人 |
| ⑦中国の政治・経済 | 中澤克二 |
| ⑧ブレクジットとEU | 佐藤大和 |

下期

- | | |
|----------|-------|
| ①世界経済の行方 | 藤井彰夫 |
| ②国内政治を占う | 坂本英二 |
| ③変わる雇用 | 水野裕司 |
| ④エネルギー政策 | 松尾博文 |
| ⑤科学技術 | 久保田啓介 |
| ⑥地方再興 | 谷 隆徳 |
| ⑦朝鮮半島情勢 | 峯岸 博 |
| ⑧日ロ関係 | 池田元博 |

【こうしてドキュメンタリーは創られる～悪戦苦闘する制作現場】

(金曜日・3時限講義)

新山賢治

この講座は、テレビ・ドキュメンタリー制作の現場で企画はどのようにして生まれ、制作者はどのように悪戦苦闘し放送にたどりついたか。また、放送後の反響にどう向き合ったかを辿りながら、メディアにとってテレビドキュメンタリーの果たしてきた役割を再確認する時間を受講者のみなさんと共有したいと考えております。

講座は大きく3つの視点から構成します。

一つ目は、過去から現在に至るまで、私や私が知る制作者が手がけたテレビ・ドキュメンタリーを、制作者の一人称で振り返り、舞台裏の悪戦苦闘に迫るものです。時に教室に制作者本人をお招きすることも考えております。

二つ目は現在、私が手がけている企画を披露しながらそれがどのように結実していくか、その悪戦苦闘の様を皆さんに披露し、同時進行で企画誕生の成り行きを体感していただきます。

三つ目は皆さんと共に、一つの企画を結実させたいと思います。2019年度、学生の皆さんが提案をした「インタビュー・ドキュメンタリー 2020年あなたは」をなんとか結実したいと思います。もう一度、提案を練り直し、ロケ、編集、MAといったポスプロ作業を進め、完成に辿り着きたいと考えております。

前年度の反省も含めて、より成果ある講座にします。よろしく申し上げます。

新山 賢治 (しんやま・けんじ)

1953年山口県生まれ 1977年日本放送協会近畿本部報道部入社。その後、報道局ディレクター、NHKスペシャルプロデューサーを経て、制作局長、理事、NHKエンタープライズ制作本部プロデューサー、現在は企画舎 GRIT 代表。2017年度「NHKスペシャル インパール 戦慄の記録」で芸術祭優秀賞、2018年度「劇場版 8Kで解き明かすからだの中の宇宙」で科学映像技術祭内閣総理大臣賞を受賞

2020年度 ジャーナ研講座 時間割

	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1 時限目 14:50～16:10	マーケティング 調査から始まる ～そして商品が 生まれる～ (坂本律行)	【後期】 体験的ジャーナ リズム論 (山田克)	この世界、そし てニュースの見 方 (桑原聡)	
2 時限目 16:30～17:50		【前期】 1億人のための 起業家的ジャー ナリズム入門～ 『一個人』に何 ができるか～ (常井健一)	【前期】 メディアリテラ シー向上講座～ 実例で探るメデ ィアのウソとホ ント (玉手義朗)	日経論説講座 (日本経済新聞 論説委員、解説 委員)
			【後期】 読む・書く・話 す・理解し考え る～新聞記事を 活用し就活を視 野に入れたトレ ーニング～ (真下聡)	
3 時限目 18:00～19:20		【後期】 1億人のための 起業家的ジャー ナリズム入門～ 『一個人』に何 ができるか～ (常井健一)	出版社の現場か ら～本づくりの 舞台裏～ (下平尾直)	こうしてドキュ メンタリーは創 られる～悪戦苦 闘する制作現場 ～ (新山賢治)

【講義概要】

1回の講義時間は80分です。

各時限は以下の通りです。

- ・ 1時限目 14:50～16:10
- ・ 2時限目 16:30～17:50
- ・ 3時限目 18:00～19:20

講義は前期・後期とも8回で構成されています。

2学期制（各学期は9週間。間に1週間の休講期間があります）です。

前期・・・5月26日（火）～7月24日（金）

後期・・・9月15日（火）～11月13日（金）

※6月23日（火）～26日（金）、10月27日（火）～30日（金）は休講です。

その他は祝日も含め原則開講します。

【開講方式】

前期

ZOOM（予定）によるオンラインにて開講。参加者にはアカウントを交付し、講義のURLをメールなどで連絡します。なお、ZOOM（予定）でのオンライン講座受講には、パソコンやタブレット、スマホなどが必要です。また、通信費用は受講生の負担となりますので、wifi環境などは各自お揃えください。

後期

オンラインと並行し、深沢校舎でも開講するかなどについては未定です。8月までに決定し連絡をいたします。

開講方式や必要機材、申し込み方法などの詳しい情報は、ジャーナリズム・政策研究所のホームページでご確認いただけます。最新の情報をぜひご入手ください。

*右のQRコードをスマホなどで撮るとリンクします。

下のアドレスもご利用ください。

<https://www.komazawa-u.ac.jp/research/labo/mass-communication/lecture-guidance.html>

